

教会暦と聖書の流れ

イエスのエルサレムへの旅は、ガリラヤに始まり、ヨルダン川を下ってきて、エリコの町に到着します。ここまでは 130km ほどで、エリコからエルサレムまでは残り 30km 足らずです。マルコ福音書では、この話の後(11 章)はもうエルサレム入りの場面ですので、エルサレムへの旅も終わりに近づいていることとなります。イエスに従うことのできなかつた金持ちの男(10・17-22)やイエスの受難の道を理解していなかった弟子たち(10・35-45)の姿と対照的に、イエスに従っていったバルティマイの姿が伝えられています。

福音のヒント

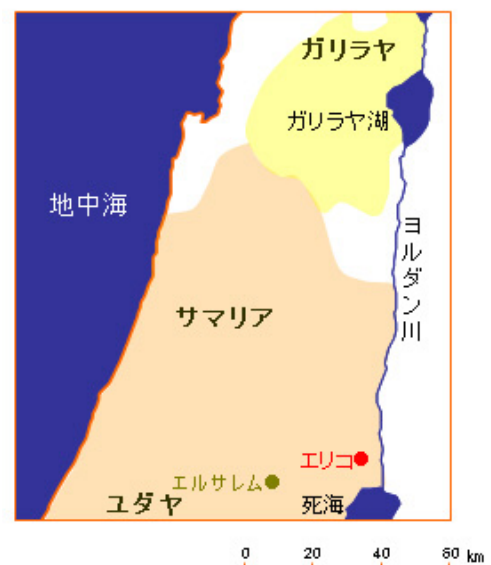
(1) 47節でバルティマイは、イエスのことを「ダビデの子」と呼びますが、これは彼自身がそう考えたというよりも、彼が聞いていた周りの人々の噂だったのでしょう。ダビデは紀元前1000年ごろのイスラエルの王で、「ダビデの子」というメシア(救い主)の呼び名には、ダビデ王の再来である理想的な王のイメージがあります。ローマ帝国の支配下にあった当時のユダヤでは、ローマの支配を打ち破り、ユダヤ人を解放してくれる王を意味していました。イエスに対するこのような期待は、イエスがエルサレムに近づくに従って膨れ上がっていたようです(マルコ11・10参照)。

「わたしを憐れんでください」は物乞いをするときにいつもバルティマイが使っていた言葉なのでしょう。イエスの周りにいた人々はこのバルティマイを黙らせようとします。王・メシアかもしれないイエスは重要人物で、何の役にも立たない「盲人の物乞い」など用がないと人々は考えたのです。しかし、イエスは彼の叫びを聞きます。

(2) 49節の「安心しなさい」はむしろ「勇気を出しなさい」と訳したほうが原文のニュアンスに近いでしょう。「お呼びだ」と訳された言葉は、直訳では「彼があなたを呼んでいる」です。

50節「上着を脱ぎ捨て、躍り上がって」はバルティマイが「盲人の物乞い」であったことを思えば、たいへんなことでしょう。この上着はおそらく彼の唯一の財産でした。そして、彼は目が見えないのですから、ふだんはそれを肌身離さず持ち歩き、歩くときは事故のないように細心の注意をもって歩いていたはずですが、それなのに彼は、自分の持ち物も自分の安全も手放すかのようにイエスのもとに向かいます。

それは「イエスが自分を呼んでいる」と知ったからです。この方は自分を邪魔者扱いしない。すべての人に邪魔者扱いされる中で、イエスという方だけは自分に目を留め、自分を呼んでくださる！ バルティマイのこの喜びを感じとれるでしょうか。



(3) イエスはバルティマイに「何をしてほしいのか」と問いかけます。9・36でイエスが弟子のヤコブとヨハネに聞いたのと同じ問いです。自分たちに高い地位を約束してほしい、というヤコブとヨハネの願いにイエスは答えませんでした。しかし、バルティマイの願いには答えます。バルティマイの願いは「先生、目が見えるようになりたいのです」というものでした。これも自分の利益を求めている願いではないでしょうか。二人の弟子の願いとバルティマイの願いは、どこが違うのでしょうか。バルティマイの願いは単なる願望以上のもの、苦しみの中からの必死の叫びだったということは大切でしょう。イエスは受難と死に向かう旅の最後まで、このような叫びに耳を閉ざすことはないのです。

(4) 「あなたの信仰があなたを救った」は、マルコ福音書では、5・34で出血の止まらない病気がいやされた女性に向かって言われた言葉でした。この「信仰」は、イエスをダビデの子であると信じるような頭の中の信仰ではありません。「この方ならなんとかしてください」という必死の思いでイエスに向かっていった態度そのものです。自分の希望と信頼のすべてを神とイエスにかける、と言ってもいいかもしれません。

52節の「なお道を進まれるイエスに従った」は、直訳では「その道の中でイエスに従った」です。この道はもちろんイエスのエルサレムへの道、受難と死に向かう道です。バルティマイは「行きなさい」と言われたにもかかわらず、イエスに従うことを選びました。このバルティマイの姿は、結局のところ財産を頼りにしてイエスに従うことのできなかつた金持ちの男や、自分たちの栄誉を求めていた弟子たちの姿とはっきりと対比されています。マルコ福音書はバルティマイの中に「十字架への道を歩むイエスに従う人」の典型的な姿を見ていると言えるでしょう。

ただし、イエスに従っていた弟子たちはイエスが逮捕されたとき、皆逃げてしまっています(マルコ14・50)からバルティマイはその時どうしたのか、と考えたくなるかもしれません。マルコ福音書はこれについて何も語っていません。ただマルコは、この箇所での人をはっきりと「バルティマイ」という名で紹介しています。マタイやルカにもこの話は伝えられていますが、いやされた人の名前はありませぬし、そもそもイエスによっていやされた人の名前が伝えられていることはめずらしいことです。もしかしたら、バルティマイは、マルコのいた教会の中で知られていた人物だったのではないのでしょうか。だとしたら、彼はこの出会いをきっかけに、生涯イエスに従い続けたと想像することもできるでしょう。

(5) バルティマイはイエスに出会って救われた、という喜びと感謝の心からイエスに従いました。十字架への道を歩むイエスに従うということは、おそらく能力や努力の問題ではないのです。イエスの弟子たちは最後までイエスに従うことができませんでした。それで終わりになったのではなく、復活したイエスとの出会いによって、再び弟子として歩み始め、そして多くの弟子が殉教していくことになりました。彼らを突き動かしていたものも、復活したイエスが自分たちに姿を現し、声をかけ、再びご自分の弟子として受け入れてくださった、という喜びと感謝ではないでしょうか。

もしも、わたしたちの中にそういう経験があったとすれば、バルティマイの物語は、今のわたしたちの物語にもなるでしょう。